

平成2年10月21日(日)

第16回 越谷市民まつり



越谷市郷土研究会展示発表用資料

けんちょうがんねんいたび

建長元年板碑 (古志賀谷氏終焉についての一考察)

らうへんづか

『良弁塚』の碑文紹介

古志賀谷氏終焉 に付いての考察

山崎 善司

第一章 古志賀谷氏の出自

1 平安より吉野朝期迄

平安中期より鎌倉初期にかけて武士団の発生と、勃興により郡、郡司の勢力は強大なものとなった。

古利根川沿岸には秀郷流藤原氏の末裔下河辺氏・大河戸氏・清久氏・高柳氏や・紀ノ氏流の春日部氏等が席捲して播擲していた。

綾瀬川と元荒川とに挟まれた地の騎西郡には、桓武平氏千葉氏流の流れを汲む、武蔵七党の一つ、野与党を称する、菅間・多名・多賀谷・道智・鬼窪・南鬼窪・白岡・黒浜・佐那賀谷・江ヶ崎・金重・渋江・箕勾・神倉・柏崎・横根・須久毛・古志賀谷・大相模・八条の諸氏が、それぞれの入植した地の地名を名字に冠して、騎西郡に点在し、開発人となって居た。

これら野与党諸氏の内、地頭職に補任されて居たのは渋江光衡（八条光平）である。

渋江光衡（平）は平安末期より鎌倉初期（一一七〇～一二三〇）に生存した人物と推量出来る。

この野与党各氏の中に、箕勾氏より出たる「古志賀谷氏」の名が見えてくる。

下記系図の如く、「古志賀谷氏」が「為基」を初祖として見え、苗字に古志賀谷郷名を冠している。

この為基が、地名を苗字に冠しているので、開発名主

で有った事はたしかで、八条・大相模氏等と共に、この時期、渋江一族の勢力が南進した事は事実で、各郷の指導者であった事が想定出来る。

この「為基」の生存年代を推定するには、千葉大系図と、前出八条光衡の事項と、越ヶ谷御殿町にある建長元年（一二四九）の板碑が重要であろう。

この建長元年の板碑は、岩槻市笹久保須久毛善念寺跡の、寛元元年（一二四三）記板碑に次ぐ南埼玉・北葛中最古の板碑で、この板碑が「古志賀谷二郎為基」の供養塔と断定するのは早計との非もあるが、

下記系図から判断すると、大体建保～建長（一二一五～四九）の時代に生存した人物と推量する事が出来る。

御殿町には、建長板碑に次ぐ貞和三年（一三四七）・寛正六年（一四六五）も同所に所在する。

その他、御殿町以外で発見された板碑は、久伊豆神社の嘉暦元年（一三二六）と、「瓜の蔓」に記載されている、建武二年（一三三五）があるが、（所在不明）何れも建長板碑のある御殿町とは隣接地である。

これ等は何れも「古志賀谷氏館跡」を知る為の生活の痕跡を知る資料である。

* 元荒川の旧河道は、天嶽寺の北側を通り、花田地区を大きく曲流していたが、幕府の河川流路改革（慶安二・三年頃）により、水の流量が減った為直線

化し、其処に出来た旧河道を開発して、美耕地と化した。この時に掘削して出来た新河道が、今の川である。

第二章 古志賀谷氏 館跡は何処に

1. 中世武士の拠点

先ず「古志賀谷氏」が、越ヶ谷の何処のあたりに居住したのだろうか。

埼玉東部地区の板碑は、概して自然堤防状の微高地か、その周辺の畑中の小埧に存在している。

越ヶ谷の地では、建長・建武・嘉暦・貞和・文和等鎌倉より吉野朝期までの間の板碑は、越ヶ谷本郷と比定出来る地以外からは発見例を見ない。

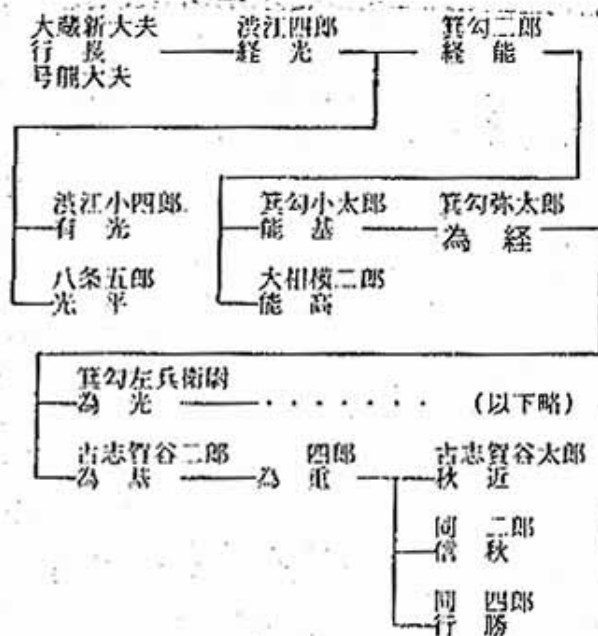
即ち、自然堤防状の微高地で、越ヶ谷で最も地盤の高い御殿町と、その周辺の類似の地点に限られている。

下図の如く、神明町より流路が東北に向かい、その先が大きく曲流している。この蛇行によって、上流よりの流出土砂は必然的に迎撰院・御殿町・天嶽寺・久伊豆神社にかけての河道に沈堆する。

これが冬期の偏西風によって、自然堤防上に吹き上げられる。永い年月の間に、自然嵩上げ状況が続き、微高地とこれに続く耕作可能な畑地が成立する。

以上の事柄を加味し考察して、「古志賀谷氏」館跡を推測すると、太郎・二郎・四郎の何れかは、定かでは無いが、次の如くと成る。

千葉大系図 (略系図)



2. 第一の地点

第一の拠点として御殿町を挙げ度い。元荒川の河川沿いの微高地に、居館を構え、北側が河川で防御に適し、南が開けて耕作に適した地である。

隣接地には、生産神の久伊豆神社と天嶽寺が在り、この地に居館を構えるのが最適地であった事であろう。

その東北端から建長板碑が建碑され、又同所からは、貞和三年(一三四七)・寛正六年(一四六五)も発見されているので、この地が「古志賀谷氏」の居館跡と推定

出来、それ等の生活の痕跡を見る事が出来る。

3. 第二の地点

新町二・三丁目南町並と、八幡神社と隣の地、澄海寺跡の有る地を、第二の地点として挙げ度い。

第一の地点と地続きで、元荒川が花田地区で大曲折して西に向かって来て、突き当り右折れした所、つまり新町二・三丁目の日光街道南西側（南町並）の地域で、八幡神社・澄海寺跡がある。（武蔵風土記記載）

この神社には文和二年（一三五三）の板碑が御神体として所蔵されている。（武蔵風土記記載）

この地には取り水口も見られ、構堀の遺溝も見られ「古志賀谷氏」の二郎か四郎かは定かでは無いが、館跡としての生活の痕跡を見る事が出来る。

4. 第三の地点

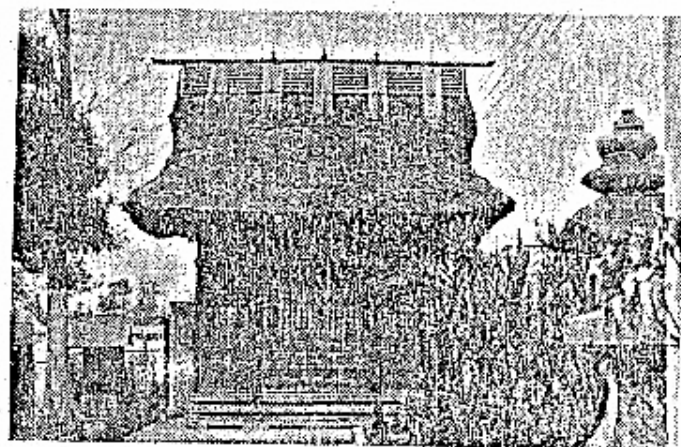
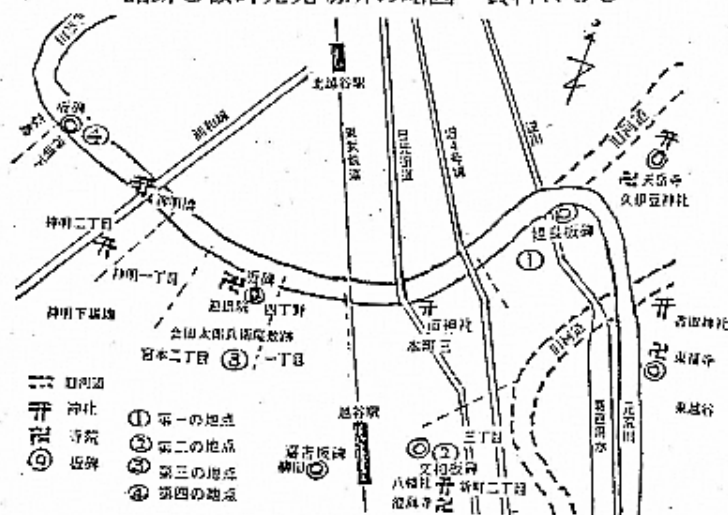
第三の拠点としては、今は川の中と成ってしまった神明宮と、四町野（現宮本町二丁目）迎撰院と、その隣接地に在る会田太郎兵衛屋敷跡を挙げ度い。

此の地は、取り水口や構堀の遺溝を見る事が出来、一方が川で防御し易く、神明宮と迎撰院とが在る。

寺院境内より板碑が発見され、後背地も広く開けて館としての立地を備えている。

* 迎撰院には応仁元年（一四六七）・文明十七年（一四八五）・永禄七年（一五六四）・最近墓地で発見の、享禄二年（一五二九）板碑を所蔵している。

館跡と板碑発見場所の略図 資料N○3



資料N○4 越ヶ谷本町市神社（嘉吉二年の棟札所蔵）

神明宮は、神明下耕地と言う地名が残る。往時「五里四方で、一番立派なお宮」と言われた神明宮があったが、流路が変り、その敷地が流れに削られ、今は川の流れの中となる。神明橋の橋桁の所は、以前神明宮があった所で、今は同町内浦和県道脇に移転となる。

* 迎撰院は越谷山神宮寺と言う寺号を持ち、往時の神明宮との関係を物語る寺号である。

この迎撰院と会田太郎兵衛屋敷跡を含めたる地域が「古志賀谷氏」の二郎か四郎かは定かでは無いが、どちらかの屋敷跡と思われるである。

第三章 永享の乱と 結城合戦

1. 永享の乱

室町時代には、上杉氏の管領職就任により、関東は以後その大半が上杉氏の領有下にあった。

永享十一年（一四三九）將軍足利義教と関東公方足利持氏との確執に端を発した、永享の乱は、足利持氏の滅亡により終るが、持氏の滅亡により関東管領職の上杉氏は、武蔵領有を確固たるものにした。

2. 結城の合戦

永享十二年（一四四〇）七月、持氏の家臣、下総幸手の「一色氏」が北一揆を催して村岡河原（熊谷市）にて上杉と合戦したが破れ、結城城に逃がれる。

結城氏朝は、持氏の遺児春王丸・安王丸・永寿王丸の三児を、日光に難を避けて居たものを、結城城に迎え入れて盾籠り、結城の合戦が始まる。

これに困り越谷市の東半分は（下総国）は結城方で、西半分（武蔵国）でも又、合戦が有り、騒然と成り混乱したであろう事が、合戦塚等の痕跡で窺う事が出来る。

その後一年の間、十万の大軍に包囲され乍ら良く戦ったが、春王丸・安王丸・永寿王丸等遺児等が城脱出の際捕えられ、遂に氏朝初め諸将は、自害して果て結城城は落城した。斯て結城の合戦は終る。

三人の遺児は、京に送られたが、途次美濃国垂井にて切られる。永寿王丸は、幼児の為に辛くも一命を預けられ、土岐氏に預けられ成長する。

結城の合戦が終り、世の中が一応安穏と成るが、戦いに破れた者の家族の苦悩を物語る、悲しい話が、市内大松清浄院縁起書「清浄院由緒著聞書」に、此の辺の事情が窺える記述が残るされている。

○ この合戦の翌年、嘉吉二年（一四四二）の板碑が東柳田（現赤山町六丁目）の忌田の小塚に在ったが今は無いと、新編武蔵風土記稿に記載されている。

* 伝承では、「昔、ここで合戦があり、多数の死者を葬った所」と云われている。

○ 又、越ヶ谷本町三の市神社の棟札に、嘉吉二年を見る事が出来る。（編武蔵風土記稿）

○ 市場に関する神社が建てられたと言う事は、結城合戦の後、世の中が治まり、生産が上り交易の為の六斎市が盛んになった事の証拠である。

3. 古河公方成氏

永享の乱後十五年、辛くも命を預けられた、永寿王丸は成人して美濃の土岐氏に在った時、一方主無き鎌倉は荒れ果てた儘であったので、京都の將軍家に、成人した成氏を鎌倉の主として迎え度いと願ひ出で、許されて鎌倉に帰った成氏は、「鎌倉公方」となる。

鎌倉は、興隆を見るが、足利成氏と上杉氏との確執が絶えず、管領憲忠を殺す。

康正元年（一四五五）成氏は、今川氏大挙鎌倉を攻める。成氏、事破れて鎌倉を追われ、下総国古河に退き築城して構え、以後「古河公方」と称す。

これに対して山内上杉氏は、太田道灌に江戸を、川越を上杉持朝に、最前線拠点の岩槻は、太田道真に、それぞれ修築城を命じて、これに対峙した。

* 岩槻築城の成る康正三年（一四五七）より、足利成氏退治が始まる。

4. 室町時代の板碑

吉野朝期より室町時代になると、同時代年記の板碑の発見例が多くなる。

- 今は無いが東柳山（現赤山六丁目）の忌田の小塚に嘉吉二年（一四四二）の板碑があった。
- 本町三の市神社の棟札に嘉吉二年記が残されている（新編武蔵風土記稿）
- 御殿町に寛正六年（一四六五）が所在する。

○ 四町野（現宮本町二）迎檣院には、応仁元年（一四六七）・文明十七年（一四八五）・永禄七年（一五五六）が所在し、最近墓地より享禄二年（一五二九）・他が発見された。

○ 神明町と荻島地区との境、元荒川の河床より発見された、康正三年（一四五七）・寛正二年・四年・七年（一四六一～六六）応仁元年・三（一四六七～六九）文明三年・五年・七年・九年・十三年・十七年・十九年・（一四七一～八七）明応八年（一四九九）に至る板碑が数十枚陸続と上げられ、尚、未だ水中に沢山ある模様である。

5. 板碑は何を語るか

越谷市内、神明下の元荒川の河床より発見された、康正三年を上限として、寛正・応仁・文明・明応八年迄四十数年間に渡るおびただしい供養の板碑は、只単に偶然と言えるであろうか、何かその辺の事情と関係あるものと考えられないだろうか？

参考資料 5. 箭弓稲荷神社縁起書

「寛正二年（一四六一）九月、足利成氏と上杉方と越谷野に於て合戦、上杉方勝利す」。

河床より発見の板碑は、資料5. の記述を裏付ける唯一の重要な資料となる板碑である。板碑は何も語らないが、越谷市の中世の歴史を物語る唯一の資料であると思はれるのである。

* 板碑発見場所は、神明と荻島の村境で元荒川が急に曲流している川州である。昔時は対岸北越谷小学校の辺を川が流れていた。

この板碑の発見者、神明町二丁目235「桃木源之助」氏は、当時の事を次の如く語っている。

* 『投網で魚取りをしている時、板碑が網に懸かった引上げて見ると後から後から沢山出て来るので、迎撰院に届けた。川に潜れば、まだまだ沢山有る』又、『その辺では、時々人骨らしき物が懸かる時があり、足の骨と分かる物もあった』と言う。

第四章 「古志賀谷氏」の終焉

1. 古志賀谷氏の台頭

平安時代末より鎌倉時代にかけて活躍した、野与党の一族「古志賀谷氏」は越ヶ谷に分派して開発播擲した。

「古志賀谷氏」は、歴史上には、その存在すら残さず、その館跡と思われる地に板碑を残すのみにて、往時を語る者も居ない終に消滅して行った。

2. 古志賀谷氏の滅亡

「古志賀谷氏」が鎌倉初期から室町期まで、約二百五十年間越谷の地に、播擲していたものが、何故、何時、この世から消滅してしまったのだろうか？

「古志賀谷氏」の消滅の時期に付いては、其の資料が希薄な為に論議に成らない事も確かである。

然し乍ら、前記の如くに中世武士の拠点を列挙し、そ

の一致点を見る時、その存在が明確に浮び上り、推測する事が出来る筈である。

さすれば今は其の存在すら知る由も無き「古志賀谷氏」の滅亡の真相も、その痕跡を辿る事により、浮上させ解明する事が出来るのでは無い出しようか。

以上の如き仮説を立て、「古志賀谷氏」に關係の有りそうな資料を列挙すると。

イ、滅亡の地は

結論的に見て、「古志賀谷氏」の終焉の地は、神明町と萩島地区との境で、今は、元荒川の中の川州となってしまう所であると想定する。

恐らくは、「かつては合戦塚が在って、その塚に戦死者の供養の為の石の卒塔婆が上げられて居た。

その塚が今は川の中となり、塚の土は川の流に削られ、板碑はその場に残り網に懸かって曳上げられたのがこの板碑である」と推測出来ないだろうか？

ロ、滅亡の時期は、

滅亡の時期は、「寛正二年（一四六一）九月、越谷野に於ける合戦で敗北した時」と言う事になる。

* 小田原北条記では六月出陣と見える。

これ又、資料が稀薄であり、然とは断定出来ないが河床から発見の板碑の年記の上限から見て、康正三年と言う事になるが、康正～長祿～寛正元年までは、上杉方は体勢造りの期間であり、事実、負け戦が多かったが、寛

正二年より攻勢に転ずる事になる。

当時の情勢から判断し、東松山市の箭弓稲荷神社の縁起書の『越ヶ谷野に於て合戦、上杉方勝利』の記述を取るならば、寛正二年（一四六一）九月が、古志賀谷氏の終焉の時期と見られる。

又、小田原北条記によると、六月上杉房顕軍二万余騎にて出陣、成氏軍七千、越ヶ谷野にて激しく戦い、両軍多数の戦死者を出し、成氏軍敗走すると記されている。

「古志賀谷氏」の滅亡の時期と思はれる、康正～寛正年間に於ける事件を列举して考察すると。

- 岩槻築城の康正三年（一四五七）より、足利成氏退治が始まる。
- 同年四月、渋川義鏡を武蔵国司として蔵に下向させ、上武相の諸将に下知して、『成氏を討取り、上杉氏を関東管領となし、関東を治むべし』との御教書が発せられる。
- 同九月、長祿（一四五七）と改元
- 長祿元年十二月將軍の弟政智を還俗させて、伊豆堀越に下向さす。堀越公方と称される。
- 長祿三年十月、上杉勢大田庄に乱入、久米原須賀・小野袋にて合戦・上杉教房討死、上杉勢・成氏方一色氏の城高野城を攻める。
- 寛正二年（一四六一）六月、越ヶ谷野に於て上杉房顕軍二万余騎、成氏軍七千にて激しく戦い、両軍多数の戦死者を出し、成氏軍敗れて古河に逃げ帰る。

○ 寛正二年（一四六一）九月、成氏と越ヶ谷野に於て戦う、上杉方勝利。（箭弓稲荷神社縁起書、前記述と同一の戦いと思われる）

○ 同十月、上杉勢、俄に高野浅間台城を急襲放火。

以上当時の事件を列举して見ると、ほぼ寛正二年六月から九月に掛けての各地の戦の内、越ヶ谷野に於ける戦により、「古志賀谷氏」が滅亡したものと推定する事が出来るのである。

「古志賀谷氏」の終焉の地と思はれる地より、多数の板碑が発見され、同所から人骨も出て居る事から、板碑は何も語らないが、一族の怨念がそうさせたのではなからうか。

ともあれ、鎌倉初期に野与党の一族として、越ヶ谷の地に興り、播擲した「古志賀谷氏」は、時代の流れの舵取りを誤らず、良く中世の変転極まり無き世を、生き抜いて来たが、上杉氏と古河公方成氏との確執の渦に巻き込まれ、遂に、上杉房顕の大軍に攻められ、越ヶ谷野に於て敗れ、寺院も館も町も破壊し焼かれ、一族は殺戮されて滅亡、此の世から消滅してしまったのでは無いだろうか、敗れた古河公方軍は、古河に逃げ帰っている。

今、「越ヶ谷氏」を名乗る家は関東に十数軒有るが、一様に先祖の地は結城と言う。

結城市の孝顕寺に、「越ヶ谷氏」と記した墓が見えるが、この一族が「古志賀谷氏」の末裔であるか否かは今の所不明である。

『良弁塚』の碑文紹介

越谷市郷土研究会理事 加藤幸一

1. 所在地 越谷市 西方 大聖寺境内

現在は惣門の南西にある。もとは県道を渡って大相模中学校に通じる道の西側の林家の敷地内(惣門の南方約六〇㍎地点)にあった。

2. 大きさ 高さ三二〇㍎ 幅一五二㍎ 厚さ一六㍎

3. 表面

良辨塚 一百二十一祐尊上人筆

4. 裏面

良辨大僧都者 相州鎌倉の住 藤原姓 染屋

太郎太夫時忠の姪也 寿山おをへら々 佛

道化縁の為小そ 聖賢は再来もありなむ

僧都 幼けぶくして 鷲乃翼に乗せられ 南

都東大寺の山中に飛入しやそ 成長の後

遍歴行脚は路次 此所う笈をお渡し 休息

せらとし牙 不思議に 笈おもくして 挙ら

されは こゝそ 有縁の地なるへきや 終小

此塚う とくまりしと也 其時の笈仏え 今

當山の本尊と仰く 不動明王是也 予と雲

水は頭陀なから 爰小杖を止め 仰き奉り

いとまの折く 藏経を讀誦し 大般若六六

軸袋細書し 法華經二十八品 一字一石小

書写し 又 昔 傳教大師 伊勢太神宮 日參の

節 太神口授の法花經 一萬枚并切紙不書

し 此塚平納 且 武蔵相模の境 支那乃坂下

今井村 金剛寺の先代 一百二十餘齡にし

て 一品親王より 栢樹院号をぬはられ

し 寿山祐尊上人へ 予も折ふし 相見し 四

方山を語りしぬし 老僧のくまはく 其許

ハ 我らと同名なりとて 念頃小かゝられ

あは 序ふ いちまきぐるハ 我ら父ハ 下總 猿

嶋郡 蓮臺村の長 染屋氏の支族 江戸に住

居して まうけらよしなり かゝる由来を

※ ぶふに 良弁大僧都ハ 深き有縁なりとて

良弁塚の三字を書し給ひし 予 是を此塚

のえはしむ致さそ 普く結縁ともなりふ

むと 石ふきさみて 建之

天保八季丁酉菊月 沙門壽山 謹識

5. 解説

良弁・華嚴宗第二祖。東大寺大仏造立に尽力し、初代別当となる。

二歳の時、大鷲にさらわれ、東大寺境内の杉の枝に置かれていたのを通りかかった義淵が助けて養ったという良弁杉伝説がある。

この『良弁塚』によると、ここ大相模不動坊を開山する。

姪・国訓では「めい」で兄弟姉妹の娘。古くは「甥」の意にも用いた。寿山・この碑を書いたお坊さん。西方福寿院墓地にある青面金剛

の碑にもこの人の名が出てくる。なお当時の大聖寺の住職は、大聖寺境内にある天保九年の庚申塔の碑によると法印戒如である。

祐尊上人・今井村金剛寺の先代の住職で寿山祐尊上人とも言う。祐尊百二十一歳の時に碑の表面の『良弁塚』の字を書いた。

※『給』

※『思』